

女子高校生の職業アスピレーションの構造¹⁾

専門職と女性職

元 治 恵 子

1 目的と先行研究の検討

長引く経済不況等を背景に、新規卒卒市場は縮小し、高校卒業後、職に就けない高卒無業者の増加やフリーターの増加などが問題視されるなど、若年層をめぐる雇用環境は決して明るいとはいえない。このような状況のなかで、現代の高校生は、どのように自分の将来像を描いているのだろうか。まず、高校生の描く将来像を職業アスピレーション、すなわち、将来の職業に向けての志望や達成欲求としてとらえることにしたい。そのうえで、女子高校生に注目し、どのような職業アスピレーションをいっているのか、そして、彼女たちの描く職業アスピレーションは、どのような要因の影響を受けているのかを検討することを本稿の目的とする。

職業アスピレーションに関する研究は、社会階層の研究、特に地位達成研究では、社会（職業）的地位を達成する過程における職業アスピレーションや教育アスピレーションの形成過程とそれぞれのアスピレーションの社会的達成に対して果たす役割（どのような影響を与えているのか）という観点から行われてきた（林，2001；片瀬1990，2003；中山・小島，1979；新谷，1996）。地位達成モデル（Blau & Duncan，1967）に社会心理学的な媒介的要因としての教育アスピレーションと職業アスピレーションを導入した一連の研究である（Alexander，Eckland，& Griffin，1975；Burke & Hoelter，1988；岩永，1990；中山・小島，1979；Sewell，Haller，& Portes，1969；Sewell，Haller，& Ohlendorf，1970）。

Sewell らの研究（Sewell，et al.，1969，1970）では、教育アスピレーションや職業アスピレーションが重要な他者（「両親の励まし」「教師の励まし」「友人の進路希望」から成る合成変数）の影響を受けつつ形成され、地位達成過程の媒介要因であることが明らかにされている。一方、教育社会学の分野でも、中・高校生などの青少年を対象に、教育選抜の過程で職業アスピレーションが分化・形成される過程をめぐって研究が行われてきた（岩木・耳塚，1983；刈谷，1986；耳塚，1988など）と同時に、高校生を対象とした調査研究では、専門職を志向する者が多いことが指摘されている（片瀬，1990；尾嶋，2001；新谷，1996）。

これらの研究の多くは、荒牧（2001）が指摘するように、職業は、社会的地位の高低²⁾からとらえられている。しかし、女性の場合、到達点としての社会的地位＝職業的地位を、男性と同じようにとらえることには、少なからず問題があるように思える。女性の労働市場への参入が進み、いまや雇用労働者の4割を占めるにいたっているが、企業社会での女性のおかれている状況や、女性がいまだ家庭生活において家事や育児の主たる担い手であることなど、女性が結婚や出産後も働き続けるにはさまざまな困難が依然存在している。やや時代は遡るが、中山（1985）が、女性の地位達成は、職業達成、家族内地位達成（結婚・出産・育児などの女性のライフイベントとの関連の中で決定され、配偶者の地位達成によって規定）、非職業的地位達成の相互連関係という形で示されると指摘したことは、現代においても、十分な有

効性を持つのではないだろうか。これらを考慮すれば、女子高校生の職業アスピレーションは、彼女たち自身が描いているライフデザインとの関連で議論される必要があるだろう。

また、職業選択(職業希望も含めて)においては、男女では違いが見られ、女子が「女性職³⁾」を志向する傾向が見られること(天野, 1980; Herzog, 1982; 片瀬, 2003; 雇用職業総合研究所, 1989; Marini & Brinton, 1984; Marini & Shu, 1998; 尾嶋, 2001 など)やそれが労働市場における、性別職域分離を反映したものであることなどが指摘されている(Gatton, DuBois, & Faley, 1999; Marini & Shu, 1998)。

これらの先行研究を踏まえ、女子高校生の職業アスピレーションを専門職志向と女性職志向という観点からとらえ、分析を進めたい。

2 データ

1999年11月から2000年1月にかけて東北大学教育文化研究会が仙台圏の高校2年生とその両親を対象に行った「教育と社会に対する高校生に意識調査 第4次調査」(以下では「高校生調査」と略称)のデータを使用する。この調査は、高校生とその両親の3者を対象にしており、親に関する情報を親本人から得ることができるという点に特徴がある⁴⁾。本稿の分析では、職業アスピレーションが「未定」の生徒と親子の対応のつかない生徒を除く女子生徒353人を対象としている。

3 分析結果

3.1 女子高校生の職業アスピレーション

分析に入る前に、同じデータを用いた職業アスピレーションの分析結果(木村・元治 2001)から、高校生の職業アスピレーションの分布を確認しておこう(図1)。職業アスピレーションは、「あなたは学校を終えた後、どんな仕事につきたいと考えていますか。一番つきたいと思っている仕事1つをなるべく具体的に書いてください。」という質問で、自由回答により回答を得ている⁵⁾。

まず、男子よりも女子の方が具体的な職業アスピレーションをもっている生徒が多いことが確認される。そして、先行研究(片瀬, 1990; 尾嶋, 2001; 新谷, 1996)でもみられるように、学校教育終了後に一番つきたいと考えている職業が「専門職」である生徒は、男女とも最も多く、男子40%、女子45%であった。一方、「なし(未定)」と答えた生徒も、男子38%、女子25%と2番目に多い。これは、男子で75%、女子で68%が大学、短大、専門学校等への進学を希望していることや、社会的な要因(労働市場の状況など)が少なからず影響を与えていると考えられる。

男女ともに専門職を希望する生徒が多いが、その詳細を見ると、男女による違いがみられる(表1)。女子に注目すると、「医療保健技術者(看護師、薬剤師など)」、「美術家・デザイナー・写真家」、「音楽家・舞台芸術家・職業スポーツ家」、「教員」、「その他(社会福祉事業専門職員、保育士)」

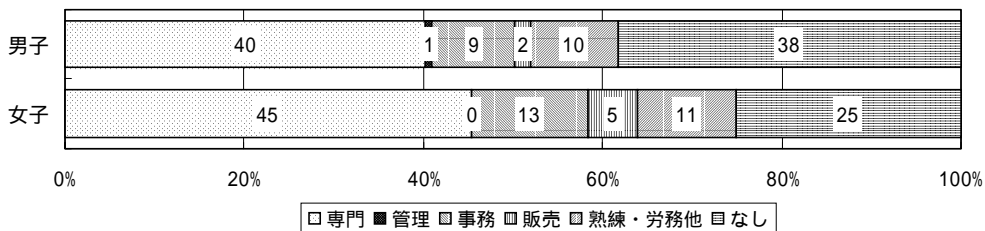


図1 学校教育終了後の職業希望(職業アスピレーション)

注) 木村・元治(2001: 17) 図1-8より、本稿の分析と関連する部分のみ転載

表1 性別専門職志向の詳細（職業中分類）

職業中分類	女	男	合計
科学研究者	4.6	7.6	6.2
技術者	8.4	24.5	16.6
医療保健技術者（看護師、薬剤師など）	25.6	8.0	16.6
法務従事者	1.3	4.0	2.7
公認会計士	0.8	1.2	1.0
教員	9.2	12.9	11.1
文芸家・記者・編集者	5.0	7.6	6.4
美術家・デザイナー・写真家	12.2	4.8	8.4
音楽家・舞台芸術家・職業スポーツ家	10.5	20.5	15.6
その他（社会福祉事業専門職員、保育士など）	19.3	7.2	13.1
アナウサー	0.4	0.0	0.2
図書館司書・学芸員	2.5	1.6	2.1
合計	100.0	100.0	100.0
(実数)	(238)	(249)	(487)

注）木村・元治（2001: 19）表 1-1 を再構成した

などが多い。特に、看護師、保育士、薬剤師などを希望する生徒が多く、近年、さまざまな職業分野への女性の進出が見られるものの、従来女性職と考えられてきた職業を希望する女子生徒は依然多いのが現状である⁶⁾。

以上の結果は、専門職 - 非専門職、女性職 - 非女性職という概念軸を導入することによって女子高校生の職業アスピレーションを検討する必要性を示唆する。

まず、女子高校生のアスピレーションをどのように分類したのかを説明しよう。専門職 - 非専門職の分類は、職業小分類をもとに大分類に再分類したものを使用した。また、女性職 - 非女性職の分類は、以下のような手続きを行った。はじめに、「高校生調査」と同年に行われた平成 12 年度の国勢調査（総務庁統計局，2001）における各職業の女性従事者比率を算出し、60%以上のものを女性職とする⁷⁾。これに女子高校生の職業アスピレーションを対応させ、再分類した。そして、これらの 2 つの分類基準の組み合わせによって 4 分類し、その分布を示したものが表 2 である。「専門職非女

性職」が、32.9%と最も多く、次いで「専門職女性職(27.2%)」、「非専門職非女性職(23.2%)」、「非専門職女性職(16.7%)」となっている。職業中分類による専門職希望の詳細（表 1）を見ると、女性職と考えられている専門職カテゴリーの比率が大きかったが、集計した結果を見ると必ずしも専門職女性職が最も多いというわけではない。しかし、平成 12 年度の国勢調査の専門職における女性従事者の比率は、42.9%であるのに対して、分析対象の女子高校生の専門職希望における女性職希望の比率は、45.3%（212 人中 96 人）となっており、若干だが高い傾向が見られる。

表2 女子高校生の職業アスピレーション

職業	% (実数)
専門職女性職	27.2 (96)
専門職非女性職	32.9 (116)
非専門職女性職	16.7 (59)
非専門職非女性職	23.2 (82)
合計	100.0 (353)

3.2 女子高校生の職業アスピレーションと母親の職業

女子の職業アスピレーションは、母親の職業との関連が強いことが明らかになっている（木村・元治, 2001; 牧野, 1989）。母親は、娘にとって最も身近な女性としてのロールモデルと考えられ、母親の生き方（職業との関わりも含め）は少なからず娘に影響を及ぼすのではないだろうか。ここでは、母親の職業との関連を見てみよう。母親の職業は、母親自身の回答である。ただし、専門職であっても、具体的な職業を聞いていないため、女性職であるのかそうでないのかは、特定できない。よって母親の職業は、専門職（13.3%）、非専門職（63.7%）、主婦（無職）（23.0%）の3カテゴリーに分類した。職業アスピレーション別に母親の職業を見ると、「専門職女性職（19.3%）」>「専門職非女性職（14.3%）」>「非専門職女性職（10.2%）」>「非専門職非女性職（6.2%）」の順で、母親が専門職である割合が少なくなっており、母親が専門職の場合の方が、専門職を希望する割合が高い傾向が見られる。母親が非専門職である割合が高いのは「非専門職女性職」で、他と比べて10ポイント以上の開きがある。また、母親が主婦である割合は、『非女性職』において高く、『女性職』において低いという傾向が見られる。以上のように、女子高校生の職業アスピレー

ションは、母親の職業の影響を少なからず受けているということが確認できる。

3.3 女子高校生の職業アスピレーションと性別役割意識

女子高校生の職業アスピレーションと性別役割意識についての関連を示したのが、表4である。「高校生調査」では、性別役割意識に関して6つの項目で調査しているが、本稿では、職業アスピレーションと最も関連が強いと考えられる性別役割分業意識（「男性は外で働き、女性は家庭を守る方がよい」）に対する回答を使用した。回答は、「そう思う」「どちらかと言えばそう思う」「どちらかと言えばそう思わない」「そうは思わない」の4段階で測定されているが、肯定的意見（『そう思う』）と否定的意見（『そう思わない』）の2つに再集計した。全般的に、性別役割分業に否定的な者が多数を占め、職業アスピレーションによる明確な差は見られないことがわかる。言い換えれば、少なくとも日常の学校生活の場では、男女の不平等をほとんど感じずに過ごしてきた現代の女子高校生にとって、性別役割分業に対して肯定的意見を表明する者は、もはや少数派であり、どのような職業を志向しているかによっての違いは、大きくないのである。しかし、細かく見ていくと『専門職』を希望する生徒の方が、性別役割分業

表3 女子高校生の職業アスピレーションと母親の職業 (%)

女子高校生の職業希望	母親の職業			合計	(実数)
	専門職	非専門職	主婦		
専門職女性職	19.3	62.5	18.2	100.0	(88)
専門職非女性職	14.3	60.2	25.5	100.0	(98)
非専門職女性職	10.2	75.5	14.3	100.0	(49)
非専門職非女性職	6.2	61.5	32.3	100.0	(65)
合計	13.3	63.7	23.0	100.0	(300)

($\chi^2 = 11.86, p < 0.1$)

表4 女子高校生の職業アスピレーションと性別役割意識 (%)

女子高校生の職業希望	性別役割意識		合計	(実数)
	そう思う	そう思わない		
専門職女性職	15.6	84.4	100.0	(96)
専門職非女性職	11.2	88.8	100.0	(116)
非専門職女性職	18.6	81.4	100.0	(59)
非専門職非女性職	20.7	79.3	100.0	(82)
合計	15.9	84.1	100.0	(353)

に対して若干否定的傾向があり、特に「専門職非女性職」を希望する者は、11.2%と最も少ない。性別役割分業に否定的で、女性比率の少ない専門職を志向するという、旧来の女性役割にとらわれていない層と見ることもできるのかもしれない。

3.4 女子高校生の職業アスピレーションと進路希望

女子高校生の職業アスピレーションと進路希望についての関連を表したのが、表5である。『専門職』を希望する生徒の7割強が短大以上を希望している。一方『非専門職』を希望する生徒の間では、『女性職』か否かによって違った傾向が見られ、「非専門職女性職」では、短大以上の希望者は、1割を超える程度にとどまるのに対し、「非専門職非女性職」では、短大以上を志向する生徒とその他の生徒が同程度となっている。

専門職は、高等教育との結びつきが強く、高等教育修了資格が前提条件として必要な職業も多い。木村(1996)が指摘するように、本稿の分析においても、高等教育は、職業的地位達成への投資として認識されているということがうかがい知れる。

表5 女子高校生の職業アスピレーションと進路希望 (%)

女子高校生の職業希望	進路希望		合計	(実数)
	短期大学以上	その他		
専門職女性職	71.9	28.1	100.0	(96)
専門職非女性職	73.3	26.7	100.0	(116)
非専門職女性職	13.6	86.4	100.0	(59)
非専門職非女性職	45.1	54.9	100.0	(82)
合計	56.4	43.6	100.0	(353)

($\chi^2 = 71.1, p < 0.00$)

3.5 女子高校生の職業アスピレーションと結婚後の就業希望

結婚後の就業希望は、「あなたは結婚しても仕事を続けるつもりですか。結婚相手がどう希望するかは別に、あなた自身の考えにもっとも近いものの1つに をつけて下さい。」という質問により、回答を得たものである⁸⁾(表6)。高校生にとって、結婚後のライフデザイン(キャリアデザイン)は、かなり不確定な要素が多い。結婚後も職業を「継続」したいと考えている者と「専業主婦」を希望する者は、大きくは、『専門職』か否かで違いが見られる。具体的には、キャリア志向の者は、『専門職』を志向し、家庭志向の者は、『非専門職』を志向する者が多い。キャリア志向の者ほど、仕事に求めるものや職業に対する意識が明確であるということなのかもしれない。また、「中断再就職」を希望する者では、『女性職』か否かで違いが見られる。家庭における育児責任を引き受けていることや企業社会における女性の多い職業を志向していることなど、家庭生活や企業社会における女性の役割を受容している様子がうかがえる。このように、結婚後の就業希望パターンは、職業アスピレーションと密接なかかわりをもっていることがわかる。

表6 女子高校生の職業アスピレーションと結婚後の就業希望 (%)

女子高校生の職業希望	結婚後の就業希望				合計	(実数)
	継続	中断再就職	専業主婦	未定		
専門職女性職	50.5	34.7	5.3	9.5	100.0	(95)
専門職非女性職	60.9	17.3	7.3	14.5	100.0	(110)
非専門職女性職	27.6	32.8	17.2	22.4	100.0	(58)
非専門職非女性職	36.7	27.8	21.5	13.9	100.0	(79)
合計	46.8	27.2	11.7	14.3	100.0	(342)

($\chi^2 = 35.37, p < 0.01$)

3.6 女子高校生の職業アスピレーションと仕事希望の強さ

『専門職』志向の者と『非専門職』志向の者で、特徴的な違いが見られる(表7)。「専門職女性職」では「ぜひ」が55.3%、「専門職非女性職」では「ぜひ」が65.5%と最も多く、『専門職』志向の者は、希望する職業へ就くことに対する希望が比較的強い傾向が見られる。また、「非専門職女性職」で、「できれば」が54.2%、「非専門職非女性職」で、「できれば」が52.4%と最も多く、『非専門職』志向の者では、希望する職業への就業希望が若干弱い傾向が見られる。これは、『専門職』志向の者の方が、職業意識が明確で、すでに自分のキャリアデザインを形成している傾向が強いということなのかもしれない。

表7 女子高校生の職業アスピレーションと仕事希望の強さ (%)

女子高校生の職業希望	仕事希望の強さ			合計	(実数)
	ぜひ	できれば	他でもよい		
専門職女性職	55.3	41.5	3.2	100.0	(94)
専門職非女性職	65.5	30.2	4.3	100.0	(116)
非専門職女性職	44.1	54.2	1.7	100.0	(59)
非専門職非女性職	41.5	52.4	6.1	100.0	(82)
合計	53.6	42.5	4.0	100.0	(351)

$$(\chi^2 = 16.25, p < 0.05)$$

3.7 女子高校生の職業アスピレーションを判別する要因

前節まで(3.2. ~ 3.6.)は、女子高校生の職業アスピレーションと個々の変数の関連を見てきた。本節では、これらの諸変数が、女子高校生の職業アスピレーションに対して、どのような効果を持っているのかを判別分析を行うことによって検討していく。使用する変数は以下の通りである。

従属変数

職業アスピレーション:「専門職女性職」「専門職非女性職」「非専門職女性職」「非専門職非女性職」の4カテゴリー

独立変数

- (1) 母親の職業(「専業主婦」を基準カテゴリーとし、「専門職」、「非専門職」をダミー変数として扱う)
母親の職業__専門職: 専門職である場合を1、それ以外の場合は0とした。
母親の職業__非専門職: 非専門職である場合を1、それ以外の場合は0とした。
- (2) 性別役割分業意識: 肯定的意見の場合を1、否定的意見の場合は0とした。
- (3) 進路希望: 短大以上を希望している場合を1、それ以外の場合は0とした。
- (4) 結婚後の就業希望(「未定」を基準カテゴリーとし、「継続」、「中断」、「専業主婦」をダミー変数として扱う)
結婚後の就業希望__継続: 結婚後も職業継続を希望する場合を1、それ以外の場合は0とした。
結婚後の就業希望__中断: 出産で退職をし、子どもの成長後、就業を希望する場合を1、それ以外の場合は0とした。
結婚後の就業希望__専業主婦: 結婚や出産で退職をし、家庭に入ること希望する場合を1、それ以外の場合は0とした。
- (5) 仕事希望の強さ: 「ぜひつきたい」に3点、「できればつきたい」に2点、「他の仕事でもかまわない」に1点を与えスコア化した。

分析の結果、表8に示したように、有意(有意水準5%)な正準判別関数が2つ得られた。まず、第1判別関数の標準化判別係数をみると、正の値では、「進路希望」が0.94と最も大きく、ついで、「結婚後の就業希望__継続(0.23)」、「仕事希望の強さ(0.21)」となっている。また負の値では、「結婚後の就業希望__専業主婦(-0.22)」、「母親の職業__非専門職(-0.22)」、「母親の職業__専門職(-0.12)」が大きな値を示している。一方、グルー

ブ別の判別関数の平均値を見ると、「専門職女性職」は0.37、「専門職非女性職」は0.40と正の値、「非専門職女性職」は-0.99、「非専門職非女性職」は-0.36と負の値を示している。このことから、第1判別関数は、専門職 - 非専門職を判別するものであることがわかる。したがって、『専門職』を希望する女子高校生は、短大以上へ進学することを志向する、結婚後も職業を継続することを望む、希望する職業へつくことを強く望むなどの傾向があり、『非専門職』を希望する女子高校生は、結婚や出産後は家庭に入ることを望む、母親が職業に従事している（専門職であっても非専門職であっても）などの傾向があるといえることができる。

つぎに、第2判別関数の標準判別係数をみると、正の値では、「母親の職業__専門職」が0.71と最も大きく、「結婚後の就業希望__中断

(0.64)」、「仕事希望の強さ(0.44)」、「母親の職業__非専門職(0.39)」が順に比較的大きな値を示している。また負の値では、「結婚後の就業希望__継続(-0.22)」、「結婚後の就業希望__専業主婦(-0.12)」が、大きな値を示している。一方、グループ別の判別関数の平均値を見ると、「専門職女性職」は0.33、「非専門職女性職」は0.18と正の値、「専門職非女性職」は-0.21、「非専門職非女性職」は-0.27と負の値を示している。このことから、第2判別関数は、女性職 - 非女性職を判別するものであることがわかる。したがって、『女性職』を希望する女子高校生は、母親が職業に従事している（専門職であっても非専門職であっても）、結婚や出産で職業を中断することを望む、希望する職業へつくことを強く望むなどの傾向があること、『非女性職』を希望する女子高校生は、結婚後も職業を継続することを望む、結婚や出産後は家庭に入ることを望むなどの傾向があるといえることができる。

以上の結果から、第1判別関数によって専門職 - 非専門職が判別され、第2判別関数によって女性職 - 非女性職が判別され、各関数における標準判別係数の値の正負の組み合わせによって4つの職業グループが判別されることが確認できる。各グループの平均値からグループごとの特徴をみると、「専門職女性職」は、第1判別関数と第2判別関数ともに正の値で、出産・育児で職業を中断することを志向する、希望する職業へつくことを強く志向するなどの傾向があり、「専門職非女性職」は、第1判別関数は正の値、第2判別関数は負の値で、短大以上へ進学することを志向する、結婚後も職業を継続することを志向する傾向があり、「非専門職女性職」は、第1判別関数は負の値、第2判別関数は正の値で、母親が職業に従事している（専門職であっても非専門職であっても）、性別役割分業に肯定的な傾向があり、そして、「非専門職非女性職」は、第1判別関数と第2判別関数ともに負の値で、結婚や出産後は家庭に入ることを望むなどの傾向があるといえる。

表8 判別分析の結果

	標準化判別係数	
	第1軸	第2軸
母親の職業__専門職	-0.12	0.71
母親の職業__非専門職	-0.22	0.39
性別役割分業意識	-0.07	0.13
進路希望	0.94	-0.07
結婚後の就業希望__継続	0.23	-0.22
結婚後の就業希望__中断	0.04	0.64
結婚後の就業希望__専業主婦	-0.22	-0.12
仕事希望の強さ	0.21	0.44
正準相関	0.47	0.25
<i>p</i>	0.00	0.03
説明率	75.5%	17.9%
	グループの判別関数の平均値	
	第1軸	第2軸
専門職女性職	0.37	0.33
専門職非女性職	0.40	-0.21
非専門職女性職	-0.99	0.18
非専門職非女性職	-0.36	-0.27
全体の判別の中率	42.3%	

ことができるだろう。この「非専門職非女性職」に関して、非女性職志向と専業主婦志向は一見矛盾するように思えるが、一般事務員（女性比率57.3%）がこの分類に入っていること、またこのカテゴリーの3割強を占めていることが、影響を与えていると推測される。

4 結果の考察と今後の課題

女子高校生の職業アスピレーションについて、専門職 - 非専門職と女性職 - 非女性職の2つの概念軸を用いて、その構造を検討した。分析の結果、女子高校生の職業アスピレーションは、自らが描くライフデザインと密接に関連していることが明らかになった。

まず、専門職を志向する生徒としない生徒の間には、進路希望、結婚後の就業希望、仕事の希望の強さの点で大きな違いが見られた。専門職志向の背景には、自分のキャリアを継続していくには、専門職であることが、有利であると考え、希望する職業への志向が強く、希望を実現するためには、高い学歴を達成することが有利であるという意識があることが示唆された。近年の社会経済的状況や女性の雇用環境にもかかわらず、積極的に、いや、むしろそのような状況を認識しているからこそ、戦略的に自らのキャリアデザインを描いているのかもしれない。また、女性職を志向する者では、希望する職業への志向はやや強いものの⁹⁾、結婚後の就業に関して、出産・育児による中断を志向する傾向が見られた。少なくとも教育の場では、男女平等意識が浸透しており、彼女たちが、日常的に男女の違いを感じることは、そう多くはないだろう。しかし、職業選択においても、女性の多い職業を志向し、育児期は職業を中断するという、社会規範としての女性役割（母親役割）を少なからず受容している様子がうかがえた。

さらに、判別分析の結果、有意な2つの判別関数が得られ、それぞれが、専門職 - 非専門職、女

性職 - 非女性職を識別していた。このことから2つの概念軸を用いる有効性が、ある程度確認できたと考える。そこから浮かび上がってきた職業アスピレーションごとの特徴は、「専門職女性職」では、希望する職業へつくことを強く志向しながらも、出産・育児で職業を中断することを志向する傾向が見られる。「専門職非女性職」では、高学歴志向であり、結婚後も職業を継続することを志向する傾向が見られる。「非専門職女性職」では、母親がなんらかの職業に従事しており、性別役割分業に肯定的な傾向が見られる。「非専門職非女性職」では、結婚や出産後は家庭に入ることを望むなどの傾向が見られるとまとめることができる。これらの結果は、女子高校生の職業アスピレーションは、自覚的なのか否かは、今回の分析では明らかではないが、自らが志向するライフデザインを反映する方向で職業が志向され、また、教育アスピレーションとも密接な関連があることを示している。

しかし、全体での判別の中率は42.3%と低く、4つのグループを判別するには、本稿の分析で用いた独立変数以外の変数（要因）を検討する必要があると示唆された。どのような職業観を持っているかということも重要な要因のひとつであるだろう。今後の課題としたい。

また、本稿の分析で用いたデータは、仙台圏の女子高校生という非常に限定されたものであり、どの程度一般化できるのかという批判もあるだろう。こちらに関しても、今後実証的研究を積み重ねることで、検討していくことが必要と考えている。

謝辞）データの使用および結果の発表にあたって、東北大学教育文化研究会の許可をえた。研究会のメンバーの先生方に、記して感謝いたします。

注)

- 1) 本稿は、日本行動計量学会第30回大会における発表をもとに、再分析をし、まとめたものである。
- 2) 職業を尺度化した職業威信スコアなど。
- 3) 「女性職」の定義は、さまざまだが、論文中で類似する表現がされている場合は含めている。
- 4) 詳細は、片瀬一男(編)(2001)を参照されたい。
- 5) 分析では、得られた自由回答に、原則として「SSM職業分類」(原, 1993)にしたがって小分類コードを割り振ったものをもとに、再分類して使用している。
- 6) 天野(1980)、尾嶋(2001)、片瀬(2003)などでも、同様のことが指摘されているが、「女性職」ではなく、「女性の「適職」」と表現されている。また、「女子型」専門職への希望形成が早く、かつ持続的な女子生徒がいるという指摘もある(雇用職業総合研究所, 1989)。
- 7) Marini & Brinton (1984)では、任意の職業における女性従事者の割合(%)により3つのカテゴリー(<30 30-59 60)に分けて分析を行っている。 について「女性職」という言及はないが、 を typically male occupations としているので、 は typically female occupations と想定していると推測される。
- 8) 回答は、「できれば、結婚後もずっと仕事をつづけたい」「結婚したら仕事をやめ、ずっと家庭に入るつもりだ」「子どもが生まれたら仕事をやめ、ずっと家庭に入るつもりだ」「子どもが生まれたら仕事をやめ、子どもの成長後、また、仕事を始めるつもりだ」「そのときになったら、考えるつもりだ」「その他()」で測定しているが、 を「継続」、 を「中断再就職」、 を「専業主婦」、 を「未定」と再分類した。また、 は「その他(10人)」は欠損値として処理した。
- 9) 若干の差だが、女性職を志向する者のほうが、「他でもよい」という者が少ない(表7)。

引用文献

- Alexander, Karl M., Eckland, Bruce K., & Griffin, Larry J. (1975) "The Wisconsin Model of Socioeconomic Achievement: A Replication", *American Journal of Sociology* 81-2: 324-342.
- 天野正子(1985)「女性にとっての青年期とその進路選択」山村健・天野郁夫編『青年期の進路選択 高学歴時代の自立の条件』有斐閣 130-156.
- 荒牧草平(2001)「高校生にとっての職業希望」尾嶋史章(編著)『現代高校生の計量社会学』ミネルヴァ書房 81-106.
- Blau, Peter M. and Duncan, Otis D. (1967) *The American Occupational Structure*. Wiley.
- Burke, Peter J. & Hoelter, Jon H. (1988) "Identity and Sex-race Differences in Educational and Occupational Aspiration Formation", *Social Science Research* 17: 29-47.
- Gatton, Debra S., Dubois, Cathy L. Z., & Faley, Robert H. (1999) "The Effects of Organizational Context on Occupational Gender-stereotyping", *Sex Roles: A Journal of Research* April.
- 原純輔(1993)『SSM職業分類(改訂版)』
- 林拓也(2001)「地位達成アスピレーションに関する一考察 先行研究の検討とキャリアアスピレーション研究の展望」『人文学報』318号: 45-70.
- Herzog, A. Regula (1982) "High School Seniors' Occupational Plans and Values", *Sociology of Education* 55: 1-13.
- 岩井八郎(2000)「近代階層理論の浸透 高度成長期以降のライフコースと教育」近藤博之編『日本の階層システム3 戦後日本の教育社会』東京大学出版会 199-220.
- 岩木秀夫・耳塚寛明(1983)「高校生 学校格差の中で」『現代のエスプリ 高校生』至文堂 No.195: 5-24.
- 岩永雅也(1990)「アスピレーションとその実現 母が娘に伝えるもの」岡本英雄・直井道

- 子(編)『現代日本の階層構造 4 女性と社会階層』東京大学出版会 91-118.
- 刈谷剛彦(1986)「閉ざされた将来像 教育選抜の可視性と中学生の『自己選抜』」『教育社会学研究 41: 95-109.
- 片瀬一男(編)(2001)『教育と社会に対する高校生の意識: 第4次調査報告書』東北大学教育文化研究会.
- 片瀬一男(2003)「夢の行方 職業アスピレーションの変容」『人間情報学研究』第8巻: 15-30.
- 木村邦博(1996)「女性にとっての学歴の意味 教育・職業と性別役割意識」鈴木昭逸・海野道郎・片瀬一男(編)『教育と社会に対する高校生の意識: 第3次調査報告書』東北大学教育文化研究会 121-138.
- 木村邦博・元治恵子(2001)「高校生の進路希望: 教育アスピレーションと職業アスピレーション」片瀬一男(編)『教育と社会に対する高校生の意識: 第4次調査報告書』東北大学教育文化研究会 11-26.
- 雇用職業総合研究所(1989)『高校生の職業希望の形成と変容』.
- Marini, Margaret M. and Brinton, Mary C. (1984) "Sex Typing in Occupational Socialization", in Reskin, Barbara F. (ed), *Sex segregation in the Workplace: Trend, Explanations, and Remedies*. National Academy Press, 192-232.
- Marini, Margaret M. and Shu, Xiaoling (1998) "Gender-related Changes in Occupational Aspirations", *Sociology of Education* 71(1): 43-67.
- 耳塚寛明(1988)「職業アスピレーション 教育選抜とアスピレーション・クライシス」『青年心理』72: 30-36.
- 中山慶子・小島秀夫(1979)「教育アスピレーションと職業アスピレーション」富永健一(編)『日本の階層構造』東京大学出版会 293-328.
- 尾嶋史章(2001)「進路選択はどのように変わったのか 16年間にみる進路選択意識の変化」尾嶋史章(編著)『現代高校生の計量社会学』ミネルヴァ書房 21-61.
- Sewell, William. H., Haller, Archibald O., and Portes, Alejandro (1969) "The Educational and Early Occupational Attainment Process", *American Sociological Review* 34(1): 82-92.
- Sewell, William. H., Haller, Archibald O., and Ohlendorf, George W.(1970) "The Educational and Early Occupational Status Attainment Process: Replication and Revision", *American Sociological Review* 35(6): 1014-1027.
- 新谷康浩(1996)「職業アスピレーションの変化 「専門職」志向を中心に」鈴木昭逸・海野道郎・片瀬一男(編)『教育と社会に対する高校生の意識: 第3次調査報告書』東北大学教育文化研究会 109-120.
- 総務省統計局(2001)『平成12年国勢調査の結果』(<http://www.stat.go.jp/data/kokusei/index.htm>)